



## 震災を風化させないための 「語り部バス」支援

### Case 2

公益財団法人  
仙台応用情報学研究振興財団 様

使用しているサービス&ソリューション

ドコモタブレット

あの日、極限状態の中で  
人々はどのような行動を取ったのか。  
生死を分けた一瞬の判断とは——。  
被災地を巡るツアーバスを  
毎日運行しながら、  
語り部ガイドの“伝えたい”思いを  
タブレットがサポートしている。



訪れる方々に、被災地の現状を  
わかりやすく伝えることが必要でした。

2011年3月11日、三陸沖を震源として発生した  
巨大地震は東北沿岸部に壊滅的な津波被害をもた  
らした。その被災地を初めて訪れる人々の目には、  
多くの景色が雑草の生い茂る荒野原に映るかも  
しれない。だが、この地にはかつて人々の生活が  
あり、職場や学校、家族と住む家があった。そう  
した記憶と震災の教訓を風化させてはいけな  
いと宮城県の仙台応用情報学研究振興財団は2013年、  
ドコモの東北復興支援助成で開発したアプリとタ  
ブレットを「語り部タクシー」に提供する支援事業  
を開始した。「運転手さんからは、タブレットで震  
災直後の状況を写真や動画で説明すると訴求力が

違うと、高く評価していただきました」と語るのは  
同財団研究主幹の堀功夫氏。

同財団はその後、南三陸ホテル観洋の女将であ  
る阿部憲子氏の発案で始まった「語り部バス」を支  
援するため、数十台のタブレットをWi-Fiで遠隔操  
作できるタブレットシステムを地元企業と協力し  
て開発し、2014年より実証実験をスタートさせた。  
バスツアーでは、写真、動画、データ、新聞記事  
などを日英2か国語の説明で提供し、国内外から訪  
れる人々に被災地のリアルな現状とともに震災前  
後の姿を伝え、震災の記憶を後世につなぐための  
力強いツールとなっている。





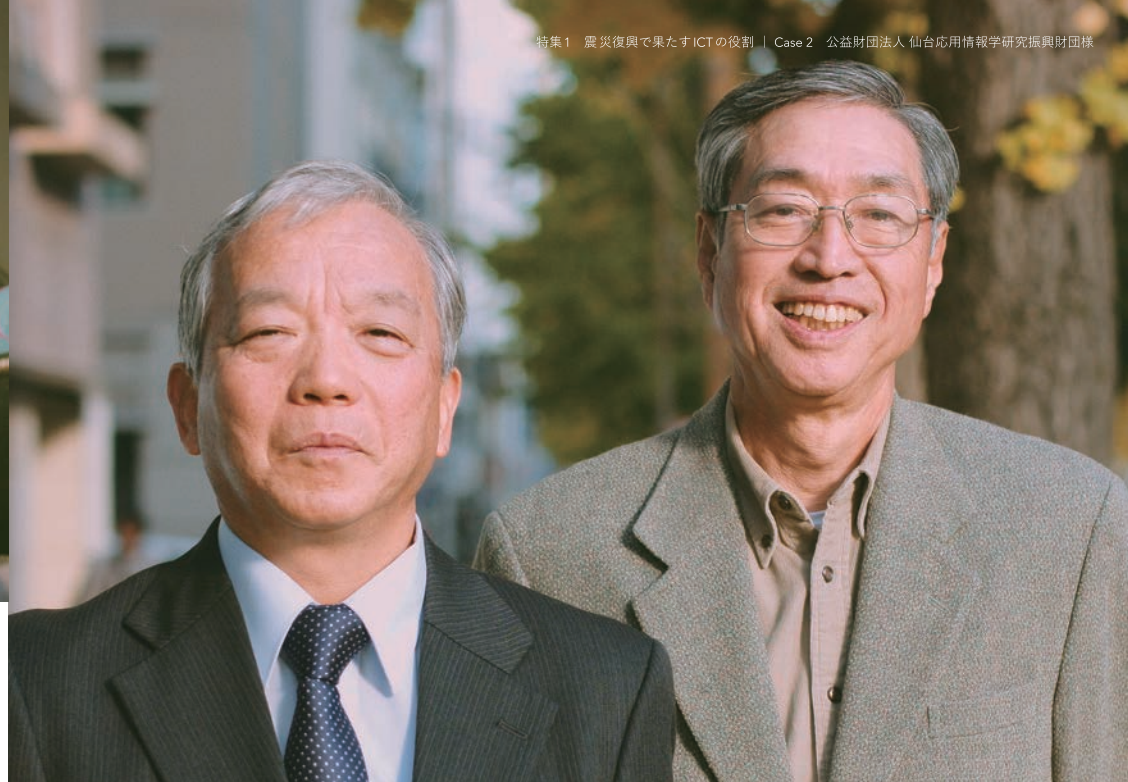
#### 活用事例

語り部ガイドの説明に合わせて、画面に鮮明な写真や動画を表示。津波の様子もリアルに伝えます。



#### 導入効果

ツアー参加者は震災前の写真と現在の被災地を見比べることで、震災の教訓をより深く学ぶことができます。



事務局長 成田 和夫氏

研究主幹 梶 功夫氏

## 「東北発の新たな観光ガイドシステムとして、 全国展開を推進していきたい」

南三陸町にありながら頑丈な岩盤の高台で一部の被災ですんだ南三陸ホテル観洋は、震災後いち早くボランティアや避難民を受け入れるとともに、被災者でもある従業員がガイドを務める語り部バスの運行を2012年2月より開始。これまで累計6万人以上\*の宿泊客を被災地に案内している。女将の阿部憲子氏は「被災による瓦礫などが片付けられた後の景色を見て、以前のお客様は“ここは初めから野原だったんですか”とおっしゃいました。ですが、今はタブレットで被災前の写真と見比べるだけで、何が起きたかを理解してくださる。仙台応用情報学研究振興財団の皆様は、この地を自然災害の学びの場としても発展させていく有意義なシステムを提案

してくださいました」と語る。

今回のシステムは、2015年3月に仙台で開催される「国連防災世界会議」において、海外から訪れる約1万人の参加者を被災地に案内するためのプロトタイプとして開発されたという経緯がある。その活用成果をベースに「将来的には東北発の新たな観光ガイドシステムとして全国展開を推進していきたい」と、同財団事務局長の成田和夫氏は夢を語る。多くの観光客が足を運べば復興はさらに加速する。まずは現地で語り部の言葉に耳を傾け、タブレットに蓄積された震災前後の記憶を体験しよう。すべてはそこから始まるはずだ。

\* 2015年1月15日時点。